

氏名(本籍地)	和田 稜三(京都府)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	博乙第64号		
学位授与年月日	平成21年9月30日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第2項該当		
論文題目	日韓における堅果食に関する文化地理学的研究 — ドングリ類と砂栗を事例として —		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	田畑 久夫
	(副査)	昭和女子大学教授	増田 勝彦
		昭和女子大学教授	山本 暉久
		昭和女子大学教授	渡辺 伸夫
		国立民族博物館教授	松山 利夫

## 論文審査結果の要旨

本論文は、ドングリ・砂栗など野生に存在する堅果類をとりあげ、詳細かつ広範囲にわたるフィールドワークに基づく資料を中心に文化地理学的手法を用いて、堅果食文化の特色とその地域性を解明しようとする大変意欲的な研究である。研究対象地域としては、日本列島および自然環境が類似している朝鮮半島南部(大韓民国)が選ばれた。堅果食の分布・比較に関しては、日韓における他地域でのフィールドワークで入手した第1次資料を主体に論を展開している。しかもこの点については、多くの資料を用いて詳細に裏付けられており、高く評価することができる。

このような特色を有する本論文は、申請者が過去に発表した論文18編を中心に再整理したもので、大きく、序章、第I編、第II編、補足論文(付論)、結語および参考文献から構成されている。

序章では、本研究の目的や方法など理論的側面を論じるとともに、従来の堅果食文化の研究動向を跡づけ、本論文の研究史上の位置づけを行った。その中でも、研究方法はフィールドワークを第一義とし、研究目的は堅果食文化の特色と地域性を解明することであると、研究方法および目的を明確に示した。

第I編は、第1章から第6章まで合計6章で構成され、日本の堅果食文化の特色と地域性を、各地でのフィールドワークの成果を中心に論を展開した。その中でも第1章は堅果食の代表の1つであるドングリ食の分布状態を森林生態系との関連において把握しようとした。食文化研究において森林生態系など自然環境を重視する研究方法は、典型的な文化地理学的手法といえよう。続く第2章から第4章までは、ドングリ食に焦点をあて加工過

程・貯蔵方式から文化的特色、さらにはその地域的性格などを詳しく分析・検討している。第 5 章から第 6 章は、同様の調査方法で砂栗に関して検討・分析を行った。

第 II 編は韓国の堅果食に関する事例研究で、第 1 章から第 5 章まで合計 5 章で構成されている。第 II 編では、現在でも堅果食が日常的に食べられることが多い。その中でもよく食べられているドングリ（第 1 章から第 4 章）・砂栗（第 5 章）に関して、それぞれの分布・比較から加工過程と貯蔵方法、さらには文化的な特色と地域性というように、第 I 編で展開した日本の堅果食文化と同様の分析手段で検討を行い論じた。その中でも第 4 章では、大邱（テグ）市周辺のドングリコンニャクに焦点をあて、フィールドワークの成果を最大限利用した非常に詳細な分析・検討を加えた。

次の補足論文（付論）において、ドングリ食を中心とする日韓の堅果食文化の比較を、第 I、II 編で論じた詳しい事例研究の成果を踏まえ、それぞれの地域の地域的特色を明確にした。最後の結論では、本研究の総括を行った。

以上述べたように、本論文は非常に困難な地域でのフィールドワークで入手した資料を中心に論じるという典型的な地理学的手法を用いたもので、大変資料性の高い好論文といえる。

審査の過程で、以下のような委員からの指摘があった。

①第 I 編、第 II 編が独立している感じがし、一体感が乏しく、分量的にも多少アンバランスである。

②①と関連するが、地理学的なかんづく文化地理学の特徴が分布を明確にしたうえでの比較であるとすれば、日・韓の比較がみられない。

③本文中の図表の一部に方向・縮尺が示されていないなど、若干の不備がみられる。

上記の①、②に関して、申請者は、補足論文（付論）を新たに作成し、日韓の比較を行い、それぞれの地域性をより明確にした。③については、すみやかに方向・縮尺を付けるなど対処した。

以上にみられるように、各委員の指摘に対しても迅速に、かつ的確に対応した。

本論文は申請者の 20 数年にわたる研究成果を集大成したものであり、本論文の章の多くは、地理学を代表する 2 雑誌『地理学評論』『人文地理学』を筆頭に大半がレフリー付きの雑誌論文によって構成され、社会的にも高い評価を受けており、新たな学術的貢献をしたものと認められる。

よって本論文が博士（学術）を取得するにふさわしい内容であることを一致して認めるものである。